こんな寂しい街で。

はなちょこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
こんな寂しい街で。

【Ｎコード】
Ｎ１５２９Ｍ

【作者名】
はなちょこ

【あらすじ】
真冬の、高層ビルに囲まれた都会。
そんな慌しい場所で主人公、森川実久はとてつもなく後悔をしていた。

穴があったら入りたい、というのはこういう時のことを言うんだ。
目の前に散らばる書類を見て、私はそう思った。
おまけに。
目の前でしゃがんでいる男性のスーツの上着に目をやった。
上着のYシャツは茶色くシミになっていた。
「僕が考え事をしていたのが悪いんですよ」
その言葉にハッとして顔を上げた。
足元に散らばる書類を慌てて拾って男性に渡した。
「いえ。でも私が・・・・・・」
そう言ってから私は下を向いた。

コーヒーを飲みながら、ぼんやりしながら歩いていて
目の前から歩いてきた男性にぶつかって
男性は持っていた書類をぶちまけ
私の持っていたコーヒーは手から離れ
男性のYシャツにかかってしまった。
それが今、目の前にいる男性だった。
断然、私が悪い。

「いつもなら避けられるんですけどね」
男性が真面目な顔でそう言ったので私は笑い出した。
「ごめんなさい。なんか想像しちゃって人ごみを避けて歩く・・・・・・」
「斎藤です」
「斎藤さんが」
私がそう言って顔を上げると斎藤さんが私を見た。
私は斎藤さんを見てから視線を下に戻した。

そしてバッグから財布を取り出してお札を数枚、手にとった。
「これクリーニング代です」
私がそう言うと斎藤さんは目を丸くさせた。
細い目が少しだけ大きくなっていた。
「いえ。いただけません。この程度のシミなら洗濯でも落ちますから」
斎藤さんはそう言って首を横に振った。
「でも私が悪いんです。本当に、ごめんなさい」
「本当、大丈夫ですから。それに学生さんからお金もらえませんよ」
「え?!」
今度は私の目が丸くなった。
「学生さんじゃないんですか?」
「・・・・・今年で二四歳になりました」
私はそう言うと冷たくなった鼻に手をやった。
「ああ。僕はてっきり高校生くらいなのかと・・・・・すみません」
斎藤さんはそう言って俯いた。
私が立ち上がると斎藤さんも立ち上がった。
「じゃあ。お詫びにお食事おごらせてください」
断られることを承知で言ってみた。
斎藤さんは少し遠くの方に視線をやりながら言った。
「コーヒーでかまいません。近くによく行くカフェがあるので、そこで」
そう言うと胸ポケットから名刺を差し出した。
名刺を受け取ると斎藤さんが言った。
「着替えてくるので少しだけ待っててもらえませんか?」
「あ、はい。じゃあコンビニで時間つぶしてますね」
私がそう言うと斎藤さんはスーツを翻して元来た道を戻って行った。

「いらっしゃいませー」
店員の明るい声が店内に響いた。
冷えた体が一気に温かくなる。
近くにあったコンビニに時間潰しに入ったものの。
落ち着かなかった。
本棚からファッション雑誌を取った。
パラパラとめくって閉じた。
何も買わずに店を出る。

「・・・・・・寒っ」
そう言って顔に当たる冷たい風に目を細めた。
目の前を足早に歩いていく沢山の人。
周りを取り囲むように聳え立つ無機質な高層ビル群。
こんな寂しい街で。
こんな寂しい時に。
あんな人に出会えるなんて思わなかった。
「斎藤一樹」
名刺に書かれた名前を声に出して読んだ。

二年間付き合った彼氏、武に別れを告げられたのは半年前のことだった。
「好きな人ができた。別れたい」
そう言って電話が切れた。
別れはあっさりしたものだった。
あれから半年経った今でも武を忘れらなかった。
もう戻れないことなんて分かっていた。

「どこもかしこもクリスマス一色ですね」
そう言って隣を歩いていた斎藤さんが少しだけ笑った。
斎藤さんは五分ほどで再び私の前に現れた。

そして斎藤さんの「よく行くカフェ」に一緒に行くところだった。

信号が青になる。

ぞろぞろと皆、一斉に歩き出した。

「あの・・・・・・」

そう言うと斎藤さんが私の顔を見た。

「敬語、いらないですよ。だって斎藤さんの方が年上でしょ？」

「いくつだと思います？」

斎藤さんが真っ直ぐ前を見ながら聞いてきた。

「・・・・・・３０ですか？」

「だったらいいですね」

「え？　分からないです。３１？　３２？」

「３８です。来年３９です。あなたから見たら、おじさんでしょう？」

「森川実久です」

「実久ちゃんから見たらイイオヤジだ」

斎藤さんはそう言って笑った。

そんな横顔を見ていると斎藤さんと目が合った。

ハッとして口を開く。

「そんなこと・・・・・・」

心臓の鼓動がいつもより速くなっていた。

風に舞う長い髪を手で押さえた。

斎藤さんの視線を感じた。

カフェはこぢんまりとした落ち着いた雰囲気の店だった。

一番、奥のテーブルにつくとメニューを見た。

「私、ホットミルクティーにしよ」

独り言のようにそう呟くと斎藤さんが近くにいた店員に声をかけた。

「ホットミルクティーとホットカフェオレで」

低い声が耳の奥に響いてくるようだった。
あっさりした顔が私好みだった。
その声も。
身長も体型も。
紳士的なその態度も。
驚くほど私の好みだった。

「彼女いるんですか？」
何気なく聞くつもりが直球になってしまった。
斎藤さんの動きが一瞬、止まった。
「・・・・・・ああ、前にいました。フラレちゃいましたけど」
そう言ってカップに視線を落とした。
「私も半年前にフラレちゃいました」
「じゃあ同じですね」
斎藤さんがそう言って少しだけ笑ってカップに口をつけながら、言う。
「でも、ふられたおかげで決心がつきました」
「え？」
私が斎藤さんの顔を見ると斎藤さんは寂しそうな顔をした。
私の顔を見てニッコリ笑ってこう言った。
「来月からアメリカに転勤になったんです」
「そうなんですか・・・・・・」
斎藤さんが窓の方を見つめた。
私はその寂しそうな横顔をしばらく眺めていた。
気付いたら、こう口走っていた。
「今日の夜、空いてますか？」
斎藤さんの驚いた顔が頭から離れなかった。

その日の夜、斎藤さんと夜６時に待ち合わせて

私のお気に入りの店で食事をした。
映画や好きな音楽の話で盛り上がった。
少しだけお酒を飲んでフワフワしている私をよそに
私よりお酒を飲んだ斎藤さんは顔色一つ変えていなかった。
会計の時、自分が出すと言って譲らない斎藤さんに
私はお礼を言ってから、こう付け加えた。
「後でお礼します」

店を出た後、酔いを覚ますかのように夜の街をブラブラ歩いた。
斎藤さんはほとんど酔っていなかったけど。
「もっと早く斎藤さんに会えれば良かった」
「え？」
「そしたらアメリカ行きも止められたかもしれないのに・・・・・・・
」
「お酒に弱いんですね」
「酔ってないです！　酔ってますけど酔ってないんです！」
「矛盾してますよ」
斎藤さんが優しく微笑んだ。
胸がドキンと飛び跳ねたと同時に。
泣きたい気持ちになった。
キラキラした夜の街に斎藤さんが消えちゃいそうだ。

私は思わずスーツの裾をグッと掴んだ。
斎藤さんが驚いた顔を私に向けた。
私は斎藤さんの顔を見ながら囁くようにこう言った。
「後でお礼します、って言いましたよね」
そして。
少しだけ背伸びをした。
斎藤さんの顔に自分の顔を近づけた。
真っ直ぐに私を見る目を間近で見て

私は崩れるように、その場に座りこんだ。
そして斎藤さんの顔を見上げて消えそうな声で言った。
「なーにしてんだろ、私。コーヒーはかけちゃうし食事には誘っちゃうし迷惑・・・・・・」
そこで口を塞がれた。
斎藤さんがしゃがんで、私にキスをしていた。
唇が離れると。
「実久ちゃん。君は可愛いからイイ男がすぐに見つかるよ」
そう言って微笑んだ。
私は俯いた。
唇をギュッとかみ締めた。
「さよなら」
斎藤さんの唇がゆっくりとそう動いた。
目から涙がこぼれた。
「斎藤さん！」
私は大きな腕を引っ張った。
すぐに振りほどかれる。
斎藤さんは私に背中を向けたままこう言った。
「今日のことはすぐに忘れるよ。君も僕も」
そして足早に歩いて人ゴミの中に消えた。

冷たい風に吹かれながら。
その場でしばらく泣き続けた。
斎藤さんが戻ってきてくれるんじゃないかと思ったけど。
二度と顔を見ることはなかった。

あの日以来、電話もメールもしなかった。
向こうから連絡が来る様子もなく
私からは拒否されるのが怖くて連絡できなかった。
斎藤さんがアメリカに行ってしまってから、私は仕事が忙しくな

り、斎藤さんのことを考えている暇はなかった。

「あー。寒い」

そう言って、はあ、と白い息を吐く。

右手に持ったキャラメルマキアートを飲むと体がポカポカしてくるようだった。

周りの店はクリスマスの飾りつけがしてあり、色々な場所からクリスマスソングが聞こえてくる。

「あれから一年か」

私はそう呟いて灰色の空を見上げた。

忙しくなって斎藤さんのことを思い出す暇がなかった。

でも。

一年前のあの日、二人でカフェに行ったり食事したり・・・・・・。

あの日の夜は一度も忘れたことはない。

指でそっと自分の唇に触れた。

あの時のことは今でも鮮明に覚えている。

胸をしめつけられるような。

切ない気持ち。

「おっ、と」

そう言って前を歩いてきた男の人が私を避けた。

「ごめんなさい」

私は慌てて顔を上げた。

まさか、と思った。

でもその男性の顔を見てガッカリした。

斎藤さんなわけ、ないか。

「鈴木！」

そんな声がして、目の前の男性が振り返った。

「肝心の書類を置いて行く気だったのか」
その声の主は急いで走ってきて目の前の男性にそう言うと。
私に気付いた。
驚いた顔で、その人を見た。
その人も驚いた顔で私を見ていた。
「斎藤課長、僕、先に行きますね」
鈴木と呼ばれた男性はニヤニヤしながら、そう言って
足早に歩いて行った。

「鈴木にコーヒーかけなかった？」
「大丈夫です」
私はそう言って少しだけ笑った。
「じゃあ急ぐから」
斎藤さんはそう言うと歩き出した。
俯いている私の横を通り過ぎる時、こう言った。
「行かないの？」
「え？！」
「昼、まだなんだよ」
斎藤さんはそう言って笑った。
「あ、じゃあ、行きます」
私はそう言ってニッコリ笑った。

（おわり）

（後書き）

読んでくれてありがとうございました。

これも過去に書いたものです。

都会が舞台のお話を書きたくてこういう雰囲気になりました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1529m/

こんな寂しい街で。

2010年10月8日14時35分発行